

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Public speaking : theory and practice : in
reference to be prepared to speak : a step-by-step
video guide to public speaking

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2004-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 和宏, Nomura, Kazuhiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/749

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



Be Prepared to Speak—A Step-by-Step Video Guide to Public Speaking に みるパブリックスピーキング論

野村和宏

1. はじめに—*Be Prepared to Speak* というビデオ教材

Be Prepared to Speak—A Step-by-Step Video Guide to Public Speaking は、1986年に米国の Kantola Productions と Toastmasters International⁽¹⁾ が共同で制作したものである。全体が一つの大きなストーリーとなっており、副題が示すように、講演の依頼を受けた主人公が原稿の作成から本番で発表を行うまでの段階を描いている。ナレーションを交えながら展開する自然な流れの中に多くのパブリックスピーキング⁽²⁾理論が埋め込まれており、ビジネス界のリーダーを始めとし、人前で話す機会を持つ人であれば学ぶところの多いものである⁽³⁾。スピーチやプレゼンテーションの指導用のビデオ教材は国内外でさまざまなものが入手できるが、スピーチの基本から応用をこのようにわずか26分の中に網羅的に見事にまとめたものは他に類をみない。ビデオを制作した Kantola Productions のウェブサイト⁽⁴⁾では次のような紹介文がみられる。

Public speaking is your single greatest opportunity to inform and influence others, and to gain their respect and loyalty. Learn how to write and organize a speech that is appropriate for your audience. Learn how to practice and what to practice, and develop the confidence to confront and overcome stage fright.

このビデオは日本でもかつて一度、日本レンタカラー社から発売されたが、

そのパンフレットには次のような米国誌評が紹介された。

This program successfully covers all the basics of planning and delivering an effective speech before an audience. The viewer will learn how to organize interesting facts in a logical manner, how to employ anecdotes as attention-getters and ice-breakers, and how to leave an audience with a lasting impression, as well as tips for overcoming stage fright. ★★★★★(Highest Possible Rating)—*Video Times*

The use of a heightened conversational speaking style is both explained and demonstrated, as is the inclusion of appropriate gestures, eye movement, pauses, and voice texture. Public library patrons will enthusiastically welcome this pleasant means of learning about the often-feared task of public speaking, while colleges may wish to make this well-crafted tape available to their students.—

Booklist

本稿ではなぜこの教材が優れたものと成り得ているのかを、内容の分析を踏まえ、パブリックスピーキング論の観点から考察し、スピーチ教育への示唆を合わせて考える。

2. *Be Prepared to Speak* の構成

全体の26分の時間の流れと内容の概略は表1のようになっている。最初の映像と音楽が開始するポイントを00分00秒とし、正確を期すためにコマ送り可能なビデオデッキを用いて時間表示を記録した。プログラムの全体は大きく 'Speech Writing' 'Speech Presentation' 'Overcoming Stage Fright' の3部に分かれている。それぞれ「原稿の推敲と準備」「練習と準備」「緊張感の克服」に焦点をあてながらも、全体の一貫した大きな流れの中で進行するため相互の関連が理解しやすい。欧米ではスピーチの準備から発表へ至るステップとして古代ギリシアのレトリック5規範(5 Canons)がしばしば引

表1: Be Prepared to Speak の内容構成

分:秒	内 容
00:00	Opening 開始の映像と音楽
00:30	San Francisco の Hyatt on Union Square での Business Meeting の様子が現れる
01:21	Narrator がビデオ全体の概略を説明する
01:53	司会者が Jerry Baker を紹介し、その後、時間を講演の依頼時まで戻す
02:07	Jerry Baker が自宅の書斎で電話による講演の依頼を受ける
03:07	Jerry Baker が自宅の庭で隣人の Art Johnson に Business Meeting の様子を尋ね、Johnson からもぜひ講演の依頼を引き受けるように促される
04:50	Jerry Baker の書斎で Narrator がスピーチの効用を説明する
05:02	Jerry Baker が Management Club の会長に承諾の電話をし、会場などを確認する
06:23	Speech Writing Jerry Baker がアイデアを書き留めながら Brainstorming を行う
07:05	Jerry Baker がスピーチ全体の構成に配慮しながら資料の収集を続ける
07:24	Introduction Section Narrator が Introduction の働きについて説明する
07:59	Jerry Baker が自宅の庭で妻にスピーチの一部を試し、感想を求める
08:12	Narrator が Jerry Baker の発表の Heightened Conversational Style に言及する
09:42	Jerry Baker の書斎で Narrator が Topic Sentences の書き方について解説する
10:36	Introduction の働きを Narrator の説明とともに画面上に文字でまとめる
10:43	Discussion Section Narrator が Discussion の働きについて説明する
10:55	Jerry Baker が自宅の居間で Art Johnson に Discussion 部分について助言を求める
11:46	Discussion の働きを Narrator の説明とともに画面上に文字でまとめる
12:05	Conclusion Section Jerry Baker が Art Johnson に Conclusion について助言を求める
13:00	Conclusion の働きを Narrator の説明とともに画面上に文字でまとめる
13:18	Presentation Jerry Baker がテープレコーダーに録音して原稿や内容を検討する
14:14	Jerry Baker が居間に百科事典を積み上げた演台を作り発表の練習を続ける
14:14	Narrator がテープやビデオを用いた練習の効果を説明する
15:19	Narrator がアイコンタクト、ポーズ、ジェスチャーなど Jerry Baker に合わせて説明する
19:21	Overcoming Stage Fright ホテルの会場で Narrator が Nervousness について説明する
20:05	Jerry Baker の行った準備と練習を映像を交えてふり返る
21:47	Jerry Baker が会場に1時間前に到着しスピーチを行う場所を確かめる
22:32	Business Meeting の会場の様子を背景に Narrator がスピーチ能力の重要性を語る
23:00	司会者が Jerry Baker を紹介し、スピーチが始まる
23:31	Narrator が Jerry Baker のスピーチの成功の鍵となる要素を語る
23:51	Jerry Baker がスピーチの Conclusion の部分で、スポーツ選手や Art Johnson などの具体例を紹介しながら Positive Imagery の重要性を伝え、拍手のうちに終える
25:42	俳優などのクレジット画面と音楽 (~26:07)

用されるが、*Be Prepared to Speak* を見る者は *Invention* (構想), *Disposition* (配列), *Rhetoric* (修辞), *Memoria* (記憶), *Delivery* (発表) といった5段階を、無意識のうちに体験できるのである。

登場人物は、ビジネスミーティングで講演スピーチの依頼を受けるスポーツ心理学者の Dr. Jerry Baker (performed by John Heart), その隣人でスピーチの専門家である Art Johnson (by Dick Bright), そして全体の進行をつかさどる Narrator (by Tom Sillen) が主である。彼らの演技は自然であり、また話されている英語は標準的で調音も明晰であり、リスニング教材としても優れたものといえる。

2.1 Speech Writing

Dr. Jerry Baker はマネジメントクラブの会長から電話で講演スピーチの依頼を受け、すぐに日時、場所等を書き留める。その後、自宅の庭でスピーチの専門家である隣人の Art Johnson にその依頼のことを伝える。実は Art Johnson も同じマネジメントクラブで一月前にスピーチをしているため、Jerry Baker は会合の様子や参加者の顔触れ、年齢層などを詳しく教えてもらう。後に Jerry Baker はクラブの会長への承諾の電話でも会場のことを確認している。これらの場面はスピーチの準備ステップとして欠かすことのできない Audience Analysis に相当する。聴衆をよりよく知るといことはよい発表を行うための重要な要素であり、Gentzler (2000: 27) には次のような Audience Analysis の項目が列挙されている。

- ・ Age (children, adults, or mixed)
- ・ Gender (male, female, or mixed)
- ・ Culture
- ・ Socioeconomic status
- ・ Educational level
- ・ Political orientation
- ・ Prior knowledge of the topic
- ・ Expectations
- ・ Biases about the topic
- ・ Size of the group

日常的に同じ相手に対して繰返し行う学校の授業などと異なり、特定の聴

衆に向けての一回限りの講演やスピーチなどでは、とりわけこの聴衆分析が大きな意味をもつことはいうまでもない。⁽⁵⁾ Narrator は、Jerry Baker が意識してこの Audience Analysis を行ったかどうかは分からないと述べているが、ビデオを見る者には Audience Analysis の重要性が十分に伝わるようになっていく。

さて Jerry Baker は原稿の準備を始める。最初から完全原稿をめざすのではなく、思いついたアイデアをまず書き留める。それらをつなぎあわせ、きちんとした文章にしようと試みるが、原稿をそのまま読むと堅苦しくなり聴衆への語りかけができないため、項目ごとのメモ書きにとどめ、それをときおり見ながら話すという方法を選ぶ。

続いてスピーチの全体を Introduction, Discussion, Conclusion と大きく分類した上、それぞれの部分の機能が要約されて画面に表示される。

- ・ Introduction Get Their Attention (attention getters)
 Identify Your Topic
 State Your Viewpoint
- ・ Discussion Organize Your Main Points
 Personalize Your Speech
 Use Vivid Language
- ・ Conclusion Cue Your Ending
 Summarize
 Leave Lasting Impression

隣人の Art Johnson と自宅の居間でスピーチについて語る場面では、本論の中で印象深いエピソードを加えるとよいことや、最後の結びをどのように行うとよいかについて助言を受ける。Art Johnson は経験を積んだ者でも結論に入る際の手がかりとして 'In conclusion' を使うことがあること、結論部分に入っているのに自分の声におぼれて延々と話し続けるべきでないこと、などを Jerry Baker に伝える。

こうしたスピーチの内容 (Content) は、論理的構成 (Logical Organization), 展開 (Speech Development), 独自性 (Originality), メッセージの価値 (Speech Value), 聴衆にふさわしいものかどうか (Appropriateness) などの観点から分析を試みる事が可能である。発表の場がフォーマルになるほど、この原稿を作成する段階での推敲は重要であり、Jerry Baker が聴衆について詳しく知ることで、そのレベルや要求にふさわしい価値あるメッセージを構築しようとしたことは正しい取り組み方である。

2.2 Speech Presentation

ビデオの続く部分は、発表について、何をどのように練習するか、という問題を取り上げている。Jerry Baker は自宅の一室で百科事典を積み上げて演台に似せた台を作っている。これは実際の講演の場で演台があることを想定し、原稿あるいはメモを置いた場合の身のこなしを練習段階で体得するためである。Portune (1999: 26) は、原稿ができ上がった段階で発表の準備が完了したと錯覚し、十分なりハーサルを行わずに本番に臨む発表者が多いが、これは全く間違いであると次のように述べる。

In public speaking, just as in any other skilled activity, lack of practice leads to "terminal mediocrity." Professional musicians, for example, know that they cannot omit practice. Yet so many speakers do not actually speak their notes out loud in practice. I suppose the reason they don't is that it is easy to feel ready to speak once you have notes on paper. Wrong.

前述の 5 Canons の観点からはこのリハーサルは第 4 の *Memoria* のステップとなり、ここでの練習を経てこそ本番での聴衆に合わせた柔軟な発表が可能となる。ビデオでは大きく次のような項目に分けて Jerry Baker の練習風景を見せる。

・ How to Practice

Picture One's Audience

Record and Observe Yourself in Videotape

・ What to Practice

Use One's Eyes Effectively

Pause to Show a Dramatic Transition

Use One's Body

Walk in Moderation

Natural Gestures

Make Pitch, Rate, and Volume Work for You

Exaggerate in Practice

Concentrate on the Images and Ideas

自分の聴衆をイメージとして思い描いて練習を行うというのは、聴衆分析に深い関係のある部分である。またこのビデオの中で Jerry Baker が取り上げたスピーチのテーマが Positive Imagery の重要性であり、スポーツ選手が常に前向きで積極的なイメージをもって試合に臨むことによる成果が、ビジネスを始めとする他の分野にも当てはまることを述べようとしている。いみじくもスピーチの練習段階でも自分の発表のイメージを思い描くために簡易演台を作って練習する姿を見せることで、そのメッセージを実践しているといえよう。

また Narrator は自分自身をビデオに記録して観察する、もしビデオ撮影が無理であればカセットテープなどに録音して客観的に自分のスピーチを分析するとよい、と語る。とりわけビデオで自分の姿を観察するのは自己発見学習につながり、改善できる点を回りの人から指摘されるよりも効果的である。⁽⁶⁾ Roman & Raphaelson (1992: 102) はよいスピーカーとそうでないスピーカーの差は 'Confidence' と 'Presence' であると述べた。自らの姿や声の調子を観察することでこうした要素が感じられるかを確認するのは意味がある。自分のよい点も改善すべき点も自ら進んで自覚するという自己啓発意

識は、よい Self-Esteem の認知につながり、さらにはスピーカーとしての Credibility⁽⁷⁾ を形成していくことになる。

さてビデオの中で練習項目として示されたものには、アイコンタクトの使用、ポーズの効果、立居振舞、ジェスチャー、声の高低・速度・音量などがある。これらについてコミュニケーションの観点から考察する。Miculka (1999 : 7) はスピーチコミュニケーションの場でメッセージの送り手と受け手の間には図1のようなやりとりが成立しているとする。

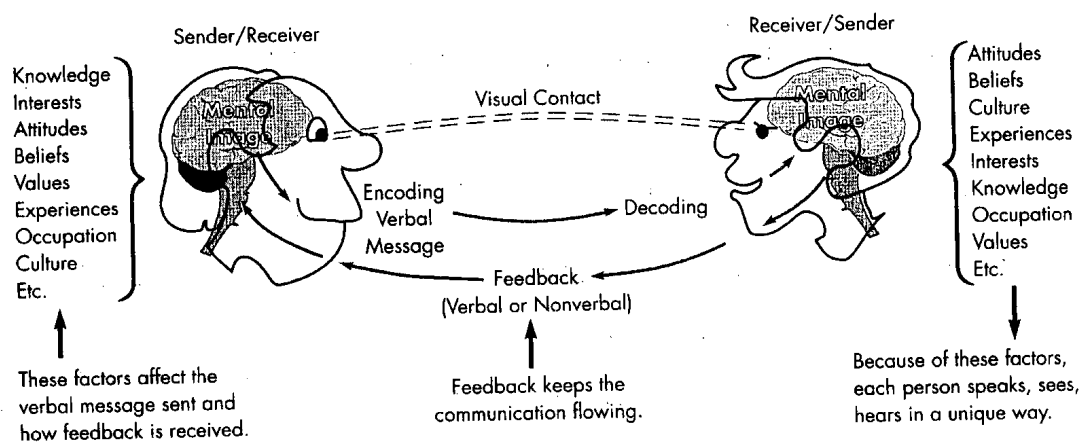


図1 A Speech Communication Model Showing Effects of Perception (Miculka (1999 : 7)より)

話者と聴衆はスピーチのメッセージ、いわゆる Verbal Message に関していえば送り手と受け手になるが、Nonverbal Message については聴衆からのフィードバックが話者に送り返されることから、送り手と受け手の関係は常にスイッチングしていることになる。視覚情報としての聴衆から話者に対してのフィードバックは、うなずき、姿勢や態度に現われる。こういった情報を的確にとらえるためには、話し手が聴衆の様子を把握できる状態にあることが必要である。そのため直接話しかける場合にはスピーカーが聴衆を観察できるよう、十分なアイコンタクトが必要であることの意味が理解できる。⁽⁸⁾

自然なアイコンタクトができるようになるには意識的な訓練が求められる。聴衆をまんべんなく見ようとして常に左右、手前、奥ときよろきよろ視線を

動かすことは、かえって落ち着きのない印象を与えてしまう。左右に加え中央手前と奥の4個所に大まかにポイントを定め、そのエリアで自分の話を集中して聴いてくれる聴衆を早めに見つけ、その人に少しの時間しっかりと目を合わせ、それから次のポイントへ移動するといった視線の移動を習得しなければならない。⁽⁹⁾ Five Canonsの最後の段階となる Delivery は、こうしたアイコンタクトや声の質と調子に加え、先に述べたポーズの効果、姿勢や立居振舞、積極性や自信のある態度といった複数の要素が相互に関連することで構築される。

Jerry Baker の練習の中で Narrator が 'walk in moderation' と述べる場面がある。この「ほどよく歩く」というのは実は難しいものである。演台がない場合、あるいは用意されていても意図的にそこから離れて自由自在に歩き回る場合がある。ここで陥りやすい失敗が、意味もなくうろうろと左右に歩き回ることである。ジェスチャーと同様、スピーチの内容よりも動きそのものに聴衆の目が引きつけられるような動きは避けるべきである。

Jerry Baker は強調すべきポイントで両手を使ったジェスチャーを行っている。スピーチの際のジェスチャーもいろいろと議論がなされるところである。こうすべきであるという定型はなく、ある話し手にとってうまくいった方法が他の話し手には効果がなかったり、あるグループに対してうまくいった方法が別の聴衆にも効果があるとは限らない。Lucas (1995:280) は 'The primary rule is this: Whatever gestures you make should not draw attention to themselves and distract from your message.' と述べている。また Wohlmuth (1990:150) は意図的にジェスチャーに関する詳しい記述を避け 'whatever comes naturally' と述べる。しかしこの naturally という概念は、手の動きを全く意識せず勝手に動くままに任せておくという意味ではない。Andrues (2003:7) は次のように述べてスピーチにおける手の使い方に注意をうながしている。⁽¹⁰⁾

... the hands are an indispensable part of any verbal presentation,

not just a pair of accessories along for the ride. Therefore, every public speaker must give due consideration to the hands, beginning with a very basic awareness of where they are and where they want to naturally stray.

一流の音楽家や俳優がステージでの本番の前に繰り返し練習し、分析的に表現効果を計算・設計し、運動の総体としてのパフォーマンスを完成させるのに対して、一般的にスピーチの発表においては原稿を仕上げることに力を注ぐ一方で、十分なりハーサルがなされないまま本番に臨んでいるきらいがある。⁽¹¹⁾意識的に練習を重ねて伝えるべき内容は完全に自分のものとして理解を深め、表現する音声も姿勢もジェスチャーも十分に咀嚼され自らの肉体と化していなければ十全な発表は期待できない。

2.3 Overcoming Stage Fright

舞台に立つ俳優が本番で緊張することから Stage Fright と呼ばれるが、舞台俳優に限らず人前で話をするスピーカーも同様の緊張感 (Nervousness) を感じるものである。スピーチコミュニケーションの立場からは Speech Fright, Speech Anxiety, Communication Apprehension と呼ばれている。また比喩的に 'have butterflies in the stomach' といった表現もある。古代ローマの哲学者キケロが *De Oratore* で 'I turn pale at the outset of a speech and quake in every limb and in my soul.' と述べたことがしばしば引用されるように、この精神状態は経験を積んだ話し手や俳優にも当然生じるものであり、全く感じないより適度に感じる方が望ましいともいわれている。結局 'how to make butterflies fly in formation' という表現のようにこの緊張をどのようにうまくコントロールし、発表にプラスに結びつけていくかが鍵となってくる。

ビデオではこの場面を Narrator の質問に Jerry Baker が自らを納得させながら答えていくという形で取り上げている。例えば 'I'm not a trained

speaker.’という命題には‘I know this material, I know how to practice.’と応じ、‘I’ll never get it perfect.’に対しては‘Nobody ever gets it perfect. This information is useful and important.’とつぶやく。‘I’m nervous.’に対しては自分を奮い立たせるように‘This is exciting. It’s an opportunity.’と語る。

そしてスピーチの当日は会場に早く到着して場所の下見を行い、自らが多くの聴衆に対して素晴らしい発表を行っている姿を想像して気持ちを高めていく様子が描かれている。Toastmasters Internationalのマニュアル *Communication and Leadership Program, Revised Edition* には‘how we can make our butterflies fly in formation’として次のような項目が示されている。

1. Know the room and the audience
2. Know our material
3. Relax
4. Visualize
5. Realize that people want us to succeed
6. Don’t apologize
7. Concentrate on the message
8. Turn nervousness into positive energy
9. Gain experience

聴衆の分析は既に原稿の準備段階で行っているとしても発表会場を十分に知らない場合には、会場に早めに到着して自分のスピーチを行う「場」を先に調べておくことが必要である。4.と 5.は後に述べる Jerry Baker の伝えようとしたメッセージに重なるものである。6. Don’t apologize も心しておくべきものである。日本人はよく言い訳をしてスピーチを始めると言われる。万が一、準備が不足していたとしてもわざわざ聴衆に言い訳することで、逆にそちらの方向に聴衆の注意を引きつけてしまうという悪循環に陥

る。本番に向けて練習を重ねていく Jerry Baker の姿はこうしたステップを具現化したものといえる。

3. Jerry Baker の伝えたメッセージ

こうしたビデオでは、ともすればパブリックスピーキングの技術的側面の指導ばかりが注目されがちだが、このビデオの中で Jerry Baker がマネージメントクラブで行ったスピーチは他の多くの場面で通用する価値あるメッセージを伝えていることに注目したい。これは 'Positive Imagery (前向きな心像, 形象)' を持つことの重要性である。スポーツ心理学者である Jerry Baker が、その経験を通して得たスポーツ選手の具体例から、帰納的にビジネスの現場、そして聴衆が将来出くわすと考えられるさまざまな現場での普遍的応用に導いている。Jerry Baker の言葉を借りれば、ビジネス交渉の場では次のようなステップが紹介されている。

1. Imagine the situation.
2. Be sure to picture the room.
3. Imagine yourself confident and calm.
4. Visualize yourself working through the sales process.
5. Picture the successful result, which is the signed contract.

これに続き、隣人の Art Johnson のような経験を積んだプロフェッショナルなスピーカーでもスピーチをキャンセルしたくなることがあるが、多くの聴衆が自分のスピーチを聴いて喜んでくれる様子を思い描くことで得難い機会であると認識するという逸話を、Art Johnson の持つ Positive Imagery の例として紹介している。Jerry Baker の結びの言葉である 'It works for successful athletes, works for Art Johnson, and it works for you.' では最後の you の部分で聴衆に対して手と指を使ったジェスチャーを同期させ、力強くスピーチを結んでいる。ビデオはここで終了するため、この Jerry Baker のスピーチに対する評価は述べられていないが、聴衆に

よる大きな拍手が何よりの報いとなり、スピーチの成功を物語っている。

このビデオでは要所要所で、Narrator や Art Johnson によって次のような表現が助言として語られる。

- ・ Practice is essential.
- ・ Be yourself. Show some enthusiasm. Prepare well.
- ・ Being a great public speaker is an asset.
- ・ Learn the audience, occasion, how big is the place.
- ・ Focus on one's goal. Tailor it to the audience.
- ・ No one will be a harsher critic than you are. Nobody is perfect.
- ・ Expert public speaking is an art.

これらは Jerry Baker が苦勞しながらスピーチを仕上げていく流れの中のまさに的確な場面で語られることにより、強い力とリアリティをもって視聴者に伝わってくるように巧妙に仕掛けられている。

4. スピーチの目的と発表形式

スピーチを通してメッセージを相手に伝えるという言語行為には当然、目的が存在する。この観点からは、説得を目的とした Persuasive Speech, 有益な情報を提供しようとする Informative Speech, 聴衆を楽しませることを目的とした Entertaining Speech, 行動を促そうとする Motivational Speech などに大きく分類でき、複数の目的を同時に達成しようとすることもある。ここでの Jerry Baker のスピーチは Motivational Speech といえる。Torok (2004: 22) は '9 Presentation Sins' の項目の1つとして 'Unclear purpose/message' を示し 'Ask yourself why you are giving this speech. Be able to state your message in one short clear phrase. Then build your presentation around that. If you can't — don't.' と述べている。⁽¹²⁾

発表形式からは大きく次の4つに分類が可能である。準備を行わず即興で行う Impromptu Speech, 準備をするがメモやアウトラインのみを参考にし

ながら行う Extemporaneous Speech, 原稿をきちんと準備し読み上げる Manuscript Speech, 暗記して原稿を見ないで発表する Memorized Speech である。このビデオでの Jerry Baker は当初はきちんと完全原稿を準備する方法をとろうとしていたが, 原稿の棒読みになる危険性に気づき, 要点項目をメモに書いて練習し, 本番ではメモを見て確認しながら直接, 話し言葉で聴衆に語りかけるという方法をとった。ビデオでは Heightened Conversational Style と述べられているが, 高度な Extemporaneous Speech といえよう。近江(1996: 298)は, 「内容のある自己表現」能力の育成を Extemporaneous Speaking を中心に展開する活動を紹介しているが, Extemporaneous Speech を「準備して暗記した部分, 読み上げる部分, 即興の部分が混在したスタイルで, その場の状況に対応しつつ語るという本来のコミュニケーションのモードを残したスピーチ」と明解に説明している。アメリカ大統領の就任演説や党大会で発表する重要なスピーチなどでは, まず完全原稿を用意する。この点からすれば Manuscript Speech であるが, これを十分に練習し, 重要な表現は Memorized Speech 同様に口に慣らしておき, 本番ではほとんど原稿に目を落とさないで聴衆への語りかけやアイコンタクトに配慮して発表する。しかし30分, ときには1時間近くに及ぶ長大な演説を完全に覚えているわけではない。リハーサルを重ねて内容は十分に自分のものとし, 本番では演台の左右の中空に設置されたプロンプターと呼ばれるパネルに表示される原稿を手がかりとしながら, できるだけ自然に即興性も感じさせながら聴衆に語りかけるというスタイルを実践しているわけである。大学の講義や学校の授業では, 教員は教科書や教材に基づき, メッセージを伝える。教授者は指導内容について十分な知識を持つものの, 教室で実際に話す説明文の原稿を書いて覚えて授業を行うことはないため, 基本的には授業も Extemporaneous Speech の一形式ととらえることができる。

スピーチの発表においては, こうした目的と形式を意識して準備することが期待されるものである。

5. スピーチ教育への示唆

近年の学習指導要領にも現われているように、積極的にコミュニケーションをはかろうとする態度につながる口頭表現力や自己表現力の向上に力が注がれるようになっている。外国語教育に限らず国語科教育でも、確かな表現力の向上をめざして「スピーチ学習」を積極的に取り入れる動きも活発化している。⁽¹³⁾西田(1996)は、中学校で国語科教員が他学科の教員と共同しティームティーチングによるスピーチ学習を導入し、その具体的活動内容と成果および課題を詳細に報告している。⁽¹⁴⁾

野村(2002: 21-32)は、大学授業の中でのパブリックスピーキング指導実践を報告している。司会進行担当、即席スピーチ発表、準備をしたスピーチの発表、相互評価活動などの役割を学生は毎週交替しながらこなしていく。これにより個々の学生が自らの責任を自覚して積極的に授業に取り組むことで、学生の共同参加発表型の授業が実現する。学習者個々の具体的な取り組みと発表能力向上の成果、学習者からの授業評価等については論をあらためたいが、こうした授業形態の結果、知識注入型授業では得られない適度な緊張感と達成感を与えることが可能となっている。奥野・甲賀・Hirokawa (1990: 96-100)は体系的にパブリックスピーキングを勉強することの効用として、1. 時間内に話せるようになる、2. 聴衆のことを考えて話せるようになる、3. よい聴き手になる、4. 的確な英語を話せるようになる、5. 表現力がつく、の5項目を示している。三熊(2002: 41-64)は大学のゼミでパブリックスピーキング発表実践を通して英語のオーラル運用能力を高め、大学生としての「知」の獲得を目指すことで、外国語スピーキング教育のもつ可能性を探求している。渡部(2001)はプレゼンテーション中心の授業を展開し「生徒が主体的に参加することにより、気づき、誇りと自身ある姿に変容していく」という生徒の姿を報告している。

このようにスピーチ教育は多くの教育成果が期待できるものであるが、教師一人が具体例を交えて、準備から練習、発表へと進む全てのステップを

的確に指導するのは困難が伴う。その意味から視覚的に分かりやすく情報を与えてくれるさまざまなビデオ教材の存在意義は大きい。とりわけパブリックスピーキング理論を的確に統合したこの *Be Prepared to Speak* は、教室の現場においても学習者にスピーチの技術的な助言のみならず、学び成長する視点でも有益なヒントを多く与えてくれるため、スピーチ指導を教室に有効に取り入れるための breakthrough となりえるものである。

注

- (1) Toastmasters International は1924年に 'to afford practice and training in the art of public speaking and in presiding over meetings, and to promote sociability and good fellowship among its members' という目的で創設されたアメリカのカリフォルニア州に本部を置く世界的な Public Speaking と Leadership 訓練の組織。世界80カ国に9,300の支部クラブをもち、日本でも60以上の支部クラブがある。本部のサイト (<http://www.toastmasters.org/>) からは詳しい情報が得られる。
- (2) パブリックスピーキングは「一人の話し手がある特定の話題についてまとまりのある内容を複数の聴衆に向って話をするスピーチ形式」と定義できる。親しい仲間の会話との違いを Hendricks et al. (1996:22) のように Speaker Dominance の観点から分析することもできる。聞き手の数が非常に多い例としては、アメリカ大統領の就任演説などがあるが、全世界に生中継され最も多くの人聞いたスピーチは、MacArthur (1999:508) によれば、1997年9月6日に英国 Westminster Abbey で行われた故 Princess Diana の葬儀での Spencer 伯のものである。
- (3) パブリックスピーキング能力について、Qubein(1997:5) はもはや「身につけていることが望ましい (no longer 'nice-to-have' skills)」という程度のものでなく「必須のもの (essential to success)」と述べている。
- (4) Kantola Productions のサイト (<http://www.kantola.com>) から Toastmasters Videos をたどると *Be Prepared to Speak* の紹介がある。
- (5) Harlan (1993) は第3章 Assessing the Speaking Situation の中で詳細な Audience Analysis を展開している。さらに巻末には3ページにわたる Audience Analysis Worksheet を掲載している(1993:232-234)。
- (6) 録音をして聞いてみるだけでも自分の声がよく響いているか確認できる。Kerr (1995:26) は 'I'm projecting my voice.' という意識が大切であると述べている。またビデオは Roman & Raphaelson が a convincing teacher (1992:103) と述べているように、自分の弱点を発見し改善していくために有効な学習方法である。ビデオを活用する際のチェック項目について Fletcher (1995:25-27) は次のように詳細にまとめている。

1. Content

- (a) Was the subject appropriate, relevant and interesting to my listeners?
- (b) Did I include smooth transitions from one point to the next?
- (c) Did I emphasize the main points enough to help my audience remember them?

2. Organization

- (a) Did I begin with an effective attention-getter?
- (b) Did the conclusion of my speech review my subject, viewpoint or discussion points?

3. Delivery

- (a) Did I project enthusiasm and confidence?
 - (b) Did I begin without referring to my notes?
 - (c) Did I maintain good posture?
 - (d) Did I speak loud enough to be heard easily by all my listeners?
 - (e) Did I enunciate clearly and pronounce words correctly?
 - (f) Did I appear to enjoy speaking?
 - (g) Did I connect with my audience from the start and then maintain that connection throughout?
- (7) パブリックスピーカーの Credibility を Timm は次のようにまとめている(2000:89)。
- To sum up, credibility is a combination of the image you have created in the past and the impression you are making in the present. You cannot erase the past, but you can strive to enhance your present credibility by conveying a sense of trustworthiness, expertise, composure, dynamism, and similarity to your audience. これは Ailes の言う「総体としての自分自身がメッセージそのものである(You are the message.)」(1988:3)という考え方につながるところがあり、教育現場からはスピーチ活動を通じた自己啓発、自己発見として大きな意味がある。
- (8) このスピーチの中での聴衆の Nonverbal Feedback の観察は、Audience Analysis が準備段階のみで終わらないことを示すものである。Timm (2000:64-65)でも Listener Analysis During the Presentation の項で 'A good presenter will note the degree of attentiveness; facial expressions; and levels of restlessness, excitement, passiveness, or apathy. All of these convey to the speaker whether or not he or she is communicating effectively.' と述べ、Audience Analysis がスピーチそのものの成否にかかわる要素であることを指摘している。
- (9) Dale & Wolf (1988:21)は日本では相手に敬意を払って直接目をじっと見ることを避ける、ブラジルでは目下の者が目上の者から目をそらすようにする、といった文化によるアイコンタクトの習慣の違いを指摘している。しかし Anderson(1997:210-212)が「話し手が原稿を読めば聴衆は居眠りをする。話し手が話しかければ、聴衆は聞いてくれる。」と述べているように、聞き手を全く見ないで話し続けるということは、話し手が聞き手に関心を持たず、一生懸命に伝えたいという気持ちがない、と受け取られる可能性が高い。
- (10) Andruess はパブリックスピーキングにおける両手によるジェスチャーを論じる際に、スピーチ指導者である Gary Plaag の指導方法を紹介している(2003:7)。Plaag はまず第一段階としてビデオを撮影して一緒に見て検討し「まともに見ることができれば大丈夫」と述べている。さらに次の段階として「どうしても勝手に動き回る両手をコントロールできないスピーカーには、ボーリングのボールを持たせてもう一度スピーチをさせることで手の動作が本当に必要なかを認識させる」という訓練方法を紹介している。野村(1997:19)はあるスピーチコンテストで女子学生があまりにも大げさなジェスチャーを行ったために、せっかくの素晴らしい英語から聴衆の注意がそがれたことを指摘している。
- (11) 大学のスピーチコミュニケーションの授業で学生に3分程度と指示し、あらかじめ数週間の時間的余裕を与えて発表の準備をさせた。しかし2クラス33名の学生の発表は最長が7分4秒で、平均でも4分14秒と大幅に時間を超過してしまうケースが多かった。これは事前に時間を

計るなど十分なりハーサルを重ねていないためと考えられる。一方で時間内に終えるために非常に早く話す学生もある。Porter & Grant (1992:223)はこの問題を次のように指摘している。

Often, non-native speakers of English worry that they lack fluency in English, and so they try to speak quickly to make up for it. But that doesn't solve the problem; it just makes it more difficult for listeners to understand them. Also, many people tend to speak more rapidly than normal when in front of a group, just because they are nervous.

(12) ちなみにTorokのいう9 Sinsとは次のものである(2004:22)。

Sin 1: Wasting time

Sin 2: Boring your audience

Sin 3: Lacking passion

Sin 4: Confusing your audience

Sin 5: Insulting your audience

Sin 6: Unclear purpose / message

Sin 7: Information overload

Sin 8: Stuck in your rut of delivery - unable to flex to the audience

Sin 9: Using slides that are boring, irrelevant or confusing

同様の分析はさまざまに行われており、Leeds (1988)はPart II: How to Overcome Six Major Speaking Faults and Shine as a Public Speakerの中で6項目として 'An Unclear Purpose' 'Lack of Clear Organization and Leadership' 'Too Much Information' 'Not Enough Support for Your Ideas, Concepts, and Information' 'Monotonous Voice and Sloppy Speech' 'Not Meeting the Real Needs of Your Audience' を示している。

(13) 例えば『教育科学：国語教育』1998年5月号(明治図書)は「スピーチ学習で確かな表現力の育成」と題し、「今なぜスピーチ学習が必要か」「スピーチ学習の基礎技術と指導の留意点」などの特集を組んだ。

(14) 平野(2002:276)は、大学レベルでも音声言語教育の意義を見いだすため、国語教育担当教員と英語教育担当の平野自身が共同して授業実践を行ったことを述べている。

参考文献

- Ailes, Roger. 1998. You Are the Message. *Power Talk* by Anthony Robbins. Bantam Doubledy Dell Publishing.
- Anderson, Walter. 1997. *The Confidence Course - Seven Steps to Self-Fulfillment*. Harper Collins Publishers.
- Andruas, Wes. 2003. A Feat for the Hands. *The Toastmaster*. July 2003. Toastmasters International.
- Carnegie, Dale. 1962. *The Quick & Easy Way to Effective Speaking*. Pocket Books.
- Cook, Jeff Scott. 1989. *The Elements of Speechwriting and Public Speaking*. Collier Books.
- Dale, Paulette & James C. Wolf. 1988. *Speech Communication Made Simple - A Multicultural Perspective*. Longman.
- Fletcher, Leon. 1983. *How to Speak Like a Pro*. Ballantine Books.
- Fletcher, Leon. 1995. How Do You Really Look and Sound? *The Toastmaster*, September 1995. Toastmasters International.

- Gentzler, Yvonne S. 2000. *Speaking and Presenting*. South-Western Educational Publishing .
- Grice, George L. & John F. Skinner. 2001. *Mastering Public Speaking*. 4th Ed. Allyn & Bacon.
- Harlan, Ray. 1993. *The Confident Speaker — How to Master Fear and Persuade an Audience*. McGuinn & McGuire Publishing.
- Harrington, David H. & Charles LeBeau. 1996. *Speaking of Speech*. Macmillan Languagehouse.
- Hendricks, William, Micki Holliday, Recie Mobley, and Kristy Steinbrecher. 1996. *Secrets of Power Presentations*. Career Press.
- Hirano, Michiyo (平野道代) 2002. パフォーマンス教育の意義と展開『オーラルコミュニケーションの理論と実践』三修社.
- Kerr, Cherie. 1995. *I've Asked Miller to Say a Few Words — The Book That Revolutionizes Public Speaking*. ExecuProv Press.
- Leeds, Dorothy. 1988. *PowerSpeak*. Berkley Books.
- Lucas, Stephen. 1995. *The Art of Public Speaking*, 5th Ed. McGraw Hill.
- MacArthur, Brian. 1995. *The Penguin Book of Historic Speeches*. Penguin Books.
- MacArthur, Brian. 1999. *The Penguin Book of Twentieth-Century Speeches*. Penguin Books.
- Miculka, Jean H. 1999. *Speaking for Success*. South-Western Educational Publishing.
- Mikuma, Yoshifumi (三熊善文) 2002. パブリックスピーキングの実践と知的昇華『オーラルコミュニケーションの理論と実践』三修社.
- Nishida, Takuro (西田拓郎) 1996. 『ティーム・ティーチングによるスピーチ学習の改革』明治図書.
- Nomura, Kazuhiro (野村和宏) 1997. 英語スピーチの技術：効果的にメッセージを伝えるために『CAT』アルク.
- Nomura, Kazuhiro (野村和宏) 2002. パブリックスピーキングを構成する要素と授業実践 『オーラルコミュニケーションの理論と実践』三修社.
- Ohmi, Makoto (近江誠) 1996. 『英語コミュニケーションの理論と実践—スピーチ学からの提言』研究社出版.
- Okuno, Fumiaki, Michiko Koga, and Dorothy S. Hirokawa (奥野文昭・甲賀美智子・Dorothy S. Hirokawa). 1990. 『英語スピーチ・マニュアル』朝日出版社.
- Porter, Patricia A. & Margaret Grant. 1992. *Communicating Effectively in English — Oral Communication for Non-Native Speakers*. Heinle & Heinle Publishers.
- Portune, John. 1999. Why Does It Take Me So Long to Prepare a Speech? *The Toastmaster*, December 1999. Toastmasters International.
- Qubein, Nido R. 1997. *How to Be a Great Communicator — In Person, on Paper, and on the Podium*. John Wiley & Sons.
- Roman, Kenneth & Joel Raphaelson. 1992. *Writing That Works*. Harper

- Perennial Books.
- Timm, Paul R. 2000. *Speech Communication*. South-Western Educational Publishing.
- Torok, George. 2004. 9 Presentation Sins And How You Can Avoid Them. *The Toastmaster*, July 2004. Toastmasters International.
- Watanabe, Jun. (渡部淳). 2001. 『教育における演劇的知—21世紀の授業像と教師の役割—』 柏書房.
- Wohlmuth, Ed. 1990. *The Overnight Guide to Public Speaking*. Penguin Books.